

溝ノ口劇場プロデュース

となりのパンダ s 第 回公演

炎上する大奥

vol.3

〜百鬼夜行の宴〜

日時：二〇二六年六月 日〜日

場所：溝ノ口劇場

【脚本・演出・プロデューズ】山本陽将

【演出助手】三上マナ 荒井萌 高鳴亜花里

【舞台監督】溝ノ口劇場

【照明】

【音響】香田泉 (零, sRecord)

【当日制作】平野阿也

【映像制作】林義也

【映像オペ】ダイキ

【フライヤー撮影】

【フライヤーヘアメイク】

【フライヤーモデル】

【宣伝美術】

【協賛】

【協力】となりのパンダの

【協力】（五十音順）

※シナリオに著作権があります、無断での流出・使用等はおやめください。

※シナリオを公演等で使用したい場合はとなりのパンダのまでご一報頂ければと存じます。

(登場人物)

(チームA)

(チームB)

(チームC)

(チームD)

すず ……

おきく ……

らん ……

ちはや ……

りんか (兵1) ……

ちさと (兵2) ……

語り手 ……

おふく (春日局) ……

暗転。

ブル転。

下手奥に椅子が一つあり、語り手がそこに座る。

暗転。

【一幕】家康暗殺

語り手に照明サス。

語り手

げんな
元和元年、冬。かの徳川家康は75歳になっていた。長年の脅威で
あり続けた豊臣氏を滅ぼした大坂の陣——それからまだ半年足ら
ずのことである。

SE 鷹の鳴き声

語り手

織田信長、豊臣秀吉も好んだものが鷹狩である。それは飼い慣らした鷹を山野さんやに放って行う狩猟の一種である。家康も例外ではなく、誰よりも鷹狩を好んだ。心身を鍛え、快食・快眠しゅに質する養生とまで捉えていた。家臣の制止も聞かず、老体に鞭を打ちながら、野山へと足を運んでいたのである。

SE 雪山を歩く複数の足音

映像 雪

語り手

元和二年、一月二十一日。家康は僅かな側近と護衛の者たちを連れて雪山を歩いていた。家康を護衛するには心許ない人数ではあ

るが、近くに控えていたのはあの柳生一派である。柳生宗矩から絶大な信頼を置かれていた名だたる剣士たちであることが——この日に限っては深謀遠慮に長ける、家康の油断を誘ったのかもしれない。

さすが舞台下手前方へ。兵1、兵2が舞台後方に並ぶ。

語り手

雪道に、苦しそうな声を上げて蹲る女が一人いた。家康に命じられた一人の護衛が、おもむろに女に近づいた。

兵1

おい、女。大丈夫か？ 腹でも痛いのか？

語り手

護衛の一人がそう声をかけた瞬間だった。女は身に付けていた長襦袢ながじゆばんを空に舞い上げると、小さなクナイで男の喉元を切り裂いた。鮮血が空に舞い、積雪を朱く染め上げた——

M 1 壮絶な戦いの曲

おきく、ちはや、らんが出てきてすずの横に並ぶ。

おきく すず！ 派手にやったな！。

すず おきく！ 出てくるのが早えんだよ。俺がもう2、3人やってか
らにしろ。

らん ふざけるな。私の獲物を横取りするつもりか。

兵2 なんだお前たちは……！ 豊臣の残党か！？ いや全員女……く
ノ一か！？

ちはや 悪く思うな。徳川家康、あんたの首を貫い受ける。

兵1 家康様をお守りしろ！

兵2 かかれ！ かかれ！！！！

SE 激しい斬撃の音

語り手

勝敗は初めから決まっていた。関ヶ原の戦いから16年、腕の鈍なまった柳生の剣士たちが勝てるはずもなかった。くノ一たちは獣のような素早さで雪の中を飛び回ると、瞬く間に護衛を切り裂き、徳川家康の首をもぎ取ったのである。

兵1、兵2、上手に立ち去る。

すず

家康の首、討ち取ったり〜！

おきく

くっそー。すばしっこきはすずに勝てねなあ。

すず

おきくが俺に勝てるのは大食いくらいだろ。

おきく
言ったな、すず！

らん
お前ら勘違いするな。家康の胸に先に手裏剣を投げ込んだのは私だ。つまり最初に家康を絶命させたのは私ということになる。

すず
でも武功つてのは最初に首を取った奴に与えられるんだぞ

らん
それは武士の習いだ！ 私たち忍びでは――

ちはや
あんたたち喧嘩は止めなさい。目的を果たしたんだからいいでし

よ。

らん
ふん。ちはやはすずに甘いんだよ。

すず
へへへ。俺が家康を討ったって言ったらふくは目ん玉丸くすつかな。
な。

ちはや
まったく……あんたは口を開けばふくふくって

おきく
こないだ寝言でも言ってたぞ

すず
う、うるせえ。いいだろ、別に。

おきく

でもふくのやつ、今頃どこで何してっかなー

ちはや

風の噂ではどこかの大名に嫁いで子供を作ったとか

らん

あれほどの剣技を持つふくが、人の親か。あはは、笑い種だな。

すず

どこで何しててもいいよ。ふくはふくだ！俺、いつかまたふくに会ったら家康のこと自慢っすから。

すず、らん、ちはや、おきく、上手に立ち去る。

語り手に照明サス。

語り手

徳川家康の首を取ったのは、すず、おきく、らん、ちはやと呼ばれる四人のくノ一。幼き頃から野山でくノ一として育てられてきたみなしごたちであり——三笠の里の忍びである。

暗転。

オープニング映像スタート

【二幕】大奥

SE 長い廊下に響き渡る鈴の音

語り手に照明サス。

語り手

江戸城、大奥。將軍家の血筋を守るために作られた、男子禁制の御殿である。本丸御殿は表、中奥、大奥に仕切られており、中奥と大奥を繋ぐ唯一の廊下が、御鈴廊下おすずろうかと呼ばれた。將軍が大奥へ出入りでいする際には、鈴のついた紐を引いて合図を送ったのである。

りんか、おふく、ちさとが上手から出て中央に並ぶ。

ちさと
りんか様、本日も殿は見目麗しゅうみめうるわございますね。

りんか
ちさと、惚けた顔をするでない。

ちさと
失礼致しました。

りんか
それよりおふく様、竹千代様のご容態は？

おふく
心配いらぬ。快方に向かつておる。

りんか
それは良かった……おふくさまの水垢離みずごりが御仏に届いたのでござ
いましょう。

ちさと
この真冬の最中、裸足で水を浴び続けるお姿を垣間見て、ちさと
は生きた心地がしませんでした。

おふく
私の苦行など床に臥す竹千代様の足元に及ばぬ。

りんか
竹千代様もお喜びになります。

おふく
大御所様への嘆願が実を結び、跡目争いに一つの区切りがついた

のだ。もうまもなくだ。三代將軍の誕生までは。

語り手

織田は信長一代、豊臣は秀吉、秀頼の二代で滅びた。さればこそ徳川は三代続いて盤石の体制になると誰もが思っていた。三代將軍になるのは竹千代か、国松か。その跡目争いに終止符を打ったのは、おふくが大御所と呼ばれる徳川家康に掛け合い、鶴の一声を貫つたからだと言われている。

おふく

かつて太閤秀吉様は、大御所様に「秀頼様が成人するまで政事まつりごとを託す」と仰ったそうだ。そして私もまた、大御所様から「竹千代を頼む」と賜たまわった。私には命を懸けて竹千代様を守る責務がある。竹千代様が実の父と母に冷遇され、自害されようとした日のこと

ちさと

は忘れられませぬ。

りんか　ちさと、みなまで言うな。

ちさと　失礼致しました。

りんか　わたくしは、今日までおふく様のお覚悟を傍こんにちで見参りました。大

奥法度を定めてまもなくの頃、男子禁制のしきたりを破り、城内に侵入した若侍を磔はりつけにされた……そのおふく様の芯の強さこそが、この栄えある大奥の象徴と言えましょう。

SE　長廊下をドタバタと走る音（ハツとするおふくたち）

語り手　その時、おふくたちの元に一人の女中が参上した。血相を変えた

女中は、恐る恐るおふくたちに伝令をした。

りんか　馬鹿な……！　嘘を申すではない……！

ちさと　大御所様が……お亡くなりあそばせた……？

おふく　（苦悶の表情）

りんか　何奴だ！　大御所様のお命を奪った輩は！？

おふく　……三笠の里の忍び……すずだと？

おふく、苦悶の表情を浮かべてから立ち去る。

りんか　おふく様……！

りんかとちさと、おふくを追うように立ち去る。
ブル転。

【三幕】三笠の里

SE 森の音

すず、おきく、らんが入ってくる。

明転。

おきく

腹減ったー

すず

うるせえ。さつき握り飯食ったろ。

おきく

握り飯一つで満たされるほど俺の胃袋は小さくねえんだ。

らん

口を開けば飯だ飯だと……お前の頭には米粒しか入ってないのか。

おきく

らんだって強い奴と戦いたってそればっかだろ。飢えた獣じゃ

ねえか。

らん

お前が言うな。

すず

元はと言えば家康の首を取ったって言うのに、手柄が金二両しか、もらえねえのが悪い。俺たちの仕事はそんなに安いってか。

おきく

それは仕方ねえだろ。うちの里は後ろ盾になるような大名もいねえし……それに家康は【病死】ってことにされちまったしよお。

すず

このままじゃおまんまの食い上げだ。俺たちだけならまだいい。でも三笠の里のみんなはどうなる？ 飢えて死んぢまうぞ。

語り手

天下泰平とは、戦いを生業にする者たちにとって深刻な事態であった。力のある大名のお抱えにでもならない限り、生活がままならいのである。生きる術を失くした武士たちも、多くは野伏せりとなっていた。忍び達もこれまた同様である。

おきく

あー、俺たちが風魔の一族だったらなー

すず

馬鹿いうな。あんな派手なのは忍びじゃねえ。闇に紛れて仕事するんのが俺たちの真骨頂だろ。

ちはやが入ってくる。

ちはや あんたたち、また仕事が入ったわよ。

おきく ちはやあ。殺しでも盗みでもなんでもいいけど金が欲しい。

すず そうだそうだ。

ちはや 今度の仕事は時間がかかる。その分、報酬も桁違いよ。

すず (期待せずに) いくらだ

ちはや 金百両

すず えーーーーー!

おきく お、おい! ほんとか、それ! どこのどんな依頼主ならそんな金があんだよ。

ちはや 江戸城本丸

おきく 江戸城!?

すず ヒョー! 百両ありや、当分遊んで暮らせるぞ!

らん ちはや。どんな仕事だ? 簡単なものじゃないんだろう?

ちはや 江戸城大奥に忍び込み、次期將軍候補の竹千代を護ること。

おきく 大奥って……一番警備が厳重なんじゃねえの? その竹なんとか

つつーの、何から守るんだよ。

ちはや ……

おきく お、おい。なんだよ。もったいつけんなよ。

ちはや ……大奥には夜な夜な出るらしいのよ、鬼が。

おきく 鬼!?

らん あっはっはっ! 鬼か! 気に入った! 相手にとって不足なし。

おきく 馬鹿か! 鬼だぞ! 相手は鬼だぞ!

らん 私に斬れぬ者はない。

おきく お前どうかしてんぞ！ 付き合ってらんねえ！ すず、なんとか

言ってやれ。

すず 俺はやるぞ。

おきく おうおう、そうだよ。そんな馬鹿なことはやれないって……って、

ええええっ！？ 正気か、お前！

すず 金百両なんて仕事、多分、この先二度とねえ……それに、やらない

とうちの里は壊滅だ。違うか。

おきく そりゃあ、まあ……そうかもしんねえけど……

ちはや 男子禁制の大奥には私たちのようなくノ一がうってつけてわけ。

女中の振りをして潜入し、鬼の正体を突き止める。いいわね？

ブル転（すず、おきく、ちはや、らん、語り手が立ち去る）

【四幕】再会

おふく、りんかが入ってくる。

明転。

りんか おふくさま！ なぜですか！？ なぜあのような下賤の者たちを

大奥に招き入れたのでございますか！？

おふく 申したであろう。鬼から竹千代様を護るためだ。

りんか 長ながらくここにお仕えしておりますが、わたくしは鬼など見たことは

ございませぬ。そんな姿もわからない者を恐れてどうなるので

す！？

おふく 姿がわからぬから怖いのだ。

りんか ？

おふく 姿がわからぬものに人の心は蝕まれていく。お主が思っておるほ

ど、強くはないのだ、人というものは。もちろん私もな。

りんか

では……なぜあの者たちを護衛にしたのですか？ 奴らは大御所様のお命を奪った忍びなのですよ。

おふく

金でやった仕事だ。徳川に恨みがあったわけではない。それに柳生の剣士たちをあっさり退けたというではないか。力はあるのだ。それくらいの力がないと鬼とは戦えん。

りんか

わたくしは……承服いたしかねます。この決断が、いつかおふく様の寝首を搔くことになっても、わたくしは責任を取れませぬ。

りんか、立ち去る。

入れ替わりでちさとが出てくる。

ちさと

おふく様。例の者たちが到着致しました。

おふく

あない
案内いたせ。

ちさと

かしこまりました。

おきく、すず、らん、ちはやが来る。

おきく

ひゃー、やっぱデツケーんだなー、江戸城って。

ちさと

こらお主、阿呆面をするでない。次期將軍竹千代様が乳母、おふく

様の面前ぞ。

おきく

ふくう………？

すず

ふく！？ ふくなのか！？ ふく~~~~~！

ちさと

無礼者！ 馴れ馴れしい！

おふく

ちさと。よい。下がっておれ。

ちさと

かしこまりました。

ちさと、立ち去る。

おふくが中央に移動し、忍び達が前にきておふくの横に並ぶ。

おふく

久しいな。すず、おきく、らん、ちはや。……って、おい！ すず！

抱き着くな！

すず

だってよおく！ ずっと会いたかったんだぞ！ ふくが大奥にい

たなんて、俺なんも聞いてねえ。

らん

三笠の里を出た後、どっかの大名に嫁いだんだろ？

おふく

ああ。稲葉いなば正成まさなり様という。私は子を産んだ後、竹千代様の乳母として大奥に入ったのだ。

ちはや

まさか依頼主がふくだったなんて——

おふく

話は聞いた。大御所様——家康様の首を取ったのだろうか？

すず 俺だ！ 俺だ、俺だ〜！

ちはや やめなさい、すず。

すず なんでだよ。あ、もしかしてちはやもらんがやった って――

ちはや そうじゃない。ふくが竹千代様の乳母なのだとしたら……わたし

たちはふくにとって大事な方を殺してしまったことになる。

すず どういうことだ？

らん 家康は竹千代の祖父にあたる、そういうことだろ？

すず え……？

おふく 関ヶ原での稲葉様の活躍もあり、大御所様は私を信頼し、この大

奥で竹千代様を預けてくださった。

すず じゃあ、俺たち……ふくの大事な人を――

おふく 構わぬ。それがお前たちの仕事だったのだろう。それに……過去

は変わらぬ。人の価値は未来に何を残すかで決まるのだ。

すず

ふく……

らん

ふく。ここには鬼がいると聞いた。本当か？ ふくは見たのか？

おふく

見たことはない。だが竹千代様の敵はあまたいる。鬼だけではなく、あらゆる外敵から護って欲しい。せめて竹千代様が元服し、次期將軍となるまでは。

おきく

ここにいる間はたらふく飯食えんだろ？ 構わねえよ。

ちはや

でも三笠の里のみんなは――

おふく

報酬の半分を早急はやきゅうに里へ送る。それなら当面はしのげるだろう。

ちはや

よかった。ありがとう。

すず

なあ、ふく。ふくは三笠の里に戻んねーのか？ またみんなの頭

領をやってくれよ。

おふく

ちはやが立派に勤め上げているではないか。それに大奥というのは、一度入ったらそう易々と出られるものではないのだ。

すず
でもよお……

おふく
それと他の女中の前で馴れ馴れしいのは禁ずる。お主たちもここのでのしきたりに則り、女中として過ごせ。わかつたな。

おふく、立ち去る。

おきく
なんか……ふくも変わったよな。

ちはや
里を出て何年経つてると思ってるのよ。

らん
身体が鈍なまらないように、隠れて稽古せねばならんな。

すず
俺はふくが元気ならそれでいいや！ 鬼だろうとなんだだろうと、ふくの大事な人を傷つける奴は叩き斬ってやるぜ。

おきく
じゃあ家康の首を取ったすずは真っ先に自分を叩き斬らないとな。

すず
うっせえ！ 家康を殺したのはらんの手裏剣だろ。

おきく

あ！ それ、ズルっ！

ブル転（おきく、すず、ちはや、らん、立ち去る）

【五幕】ふくの過去

SE 風の音

語り手が入ってきて座る。

照明サス。

語り手

ふくの父親はかの有名な斎藤利三である。斎藤は明智光秀の家臣として活躍した。だが本能寺の変の後、秀吉によって捉えられ、切腹を命じられたのである。

SE 群衆のざわめく怒号など。

おふくが入ってきて照明サス。

おふくは前方を見たまま目を見開く。(その目に礫にされた父親の姿を見ている)

語り手

斎藤は謀反人として衆人環視の中で礫にされたという。幼いふくはそれを目の当たりにしてしまった。それ以来、ふくには誰よりも戦を憎む心が芽生えたのである。徳川の盤石な時代を何代にも渡り、続けていくこと——それがふくの全てだった。竹千代が天然痘にかかった時も、ふくは一晩中、水垢離みずごりをした。

おふく

御仏様。どうか御仏様のお力で竹千代様をお救いください。わたしは生涯、どんな病にかかろうとも決して薬を飲みません。鍼も

灸も致しません。

語り手

水垢離とは、水、垢、離れると書く。冷水を浴びて心身の垢を落とすことで神仏への祈りを捧げるのだ。ふくの願いは通じ、竹千代は奇跡的に一命を取り留めたのである。

おふく、満足そうな笑みを浮かべた後、立ち去る。

語り手

ふくは竹千代から絶大な信頼を得た。そして竹千代を護り、徳川三代将軍にすることが、ふくの宿願となった。

SE

夜の音、梟の鳴き声など

おきく、ちはや、らんが入ってくる。

語り手

すずたちが大奥に入って三か月が経とうとしていた。夜な夜な江戸城を徘徊して鬼を探したが鬼などはどこにも見当たらなかった。

らん

警備なんてやめだやめだ！ どこに鬼がいるというのだ！

おきく

らんー。そうカツカすんなよ。いい加減、ここでの暮らしに慣れねーと。

らん

私はお前のようなぼんくらと違う。ぶくぶくと太りおって。ちはや、お前もだぞ。書物ばかり読み漁りおって。

ちはや

ここにはたくさん蔵書があるの。時間がいくらあっても足りない。い。

らん

お前は飽きないのか？

ちはや

どういうこと？

らん
炊事に、掃除に、風呂の準備に習い事って……この女たちは毎日その繰り返しだ。

ちはや
それだけここが平和だったことでしよう。いつか、大奥だけじゃなくて、日ノ本中の女たちが同じような暮らしをするかもね。

らん
そんな日が来たら……私は女を捨てる。

ちはや
はいはい。どうぞお好きに。おきく、向こうに異国の饅頭があるみたいよ。食べる？

おきく
おー！ 食う食う！

ちはや
そこは「頂く」でしょ。いつまで経っても言葉が悪いんだから。

ちはや、おきくが立ち去る。入れ替わりで、すずが入ってくる。

すず
あれ？ らんは饅頭いらねーのか？

らん
いらん。

すず
そっか、うめーのに。

らん
ふくはどこ行った？ 最近あまり見かけないが。

すず
あー、なんでも中宮様のところに伺っているらしい。

らん
中宮！？ 中宮和子様かずこのところか。なんでまた……

すず
天皇に会うのに口添えが必要だとかなんとか……天皇に謁見えっけん？

するのふさわに相応しい名がいるから、それを貰うんだと。

らん
いつの間にか、ふくは雲の上の人間になったんだな

すず
……なあ、らん。なんでふくは俺たちをここに呼んだんだろう？

らん
それは鬼を退治するためだろ。

すず
鬼なんていやしないじゃないか。

らん
それはまだ出てこないだけで――

すず
ふくは千人もいる女中たちの取締役だろ？ 俺たちなんて、その

一部にすぎないじゃないか。

らん
何が言いたいんだ？

すず
ふくが俺たちをここに呼んだ理由が、何か別にあるんじゃないかなと思っただ。

らん
……お前たちはどうか知らんが、私は戦うことしか能がない人間だ。戦場いくさばこそが華だ。私は剣に生き……剣に死ぬと決めている。

すず
らんはそう言うと思ったよ。

らん
すず。お主はどうだ？

すず
どうつて？

らん
乱世は終わった。おそらく、もうかつてのような激動の時代ではなくなるだろう。そんな世を、お主はどう渡っていくつもりだ？

すず
……（考える顔）

らん
ふん。まあいい。考える時間は有り余っているのだから。

らん、立ち去る。

【六幕】 忍びたちの過去

語り手、照明サス。

語り手

すずの家には七人の子供がいた。だが三番目の子供は身売りされて、五番目の子供は生まれてすぐに間引かれてしまった。すずは七番目の子供として生まれた。家計はやはり火の車であり、母は五番目の子供と同じように、すずを生きたまま土に埋めようとしたのである。

SE 赤ん坊の激しい泣き声

語り手

だが、すずはあらんかぎりの声で泣いた。凄まじい生命力だと母は思った。すずを持つ手が震えた。赤子が全身全霊で死を拒んでいった。母は恐怖を感じ、すずを埋める代わりに川に流した。そうして二日後の朝、すずは三笠の里に流れ着いたのである。親の顔も知らないすずは、その日から里のみんなが家族になった。

SE
山の音

すずM

俺の最初の記憶は山の中だ。物心ついた頃から、朝も晩も野山を走り回った。知恵をつけ、力をつけ、里の誰よりも速く走れるようになった。そのとき俺は、自分が山のヌシになったように誇らしかった。

すず M

だがある日、ふくという女が来た。どこぞの由緒ある家の女だという。忍びの才なんてねえと思っていたが、ふくは瞬く間に頭角を現した。ふくの剣技に、里のみんなが羨望の眼差しを向ける度、俺は自分の居場所がなくなっていくような気がして焦っていた。

すず M

ふくが三笠の里に来て二年が経った頃、山に巨大な猪が出た。それは、力自慢のくノ一が一目見て腰を抜かすほどの大きさだという。里の長は独りで山に入るべからずとお触れを出したが、俺は自分の力を誇示する絶好の機会だと思った。

SE 山の音（笹の葉の音など）

映像 山中に生い茂る木々

すず M

独りで散々山を探し回った後、俺が諦めて里に帰ろうとした時だ
まなか
った。一本道の真中に、巨大な猪がその姿を現した――

SE 猪（獣）の鳴き声

すず M

それは猪という名前を付けるのをためらうほど常軌を逸した大き
さであった。俺は石弓にでも弾かれたかのように逃げ出した。

SE 山の中を激しく駆け出す足音

すず M

猪は俺を追いかけてきた。俺は持っていた武器を全て投げ出して
必死に逃げた。だが力尽き、山道で激しく転倒してしまった。俺は

死を覚悟した。その時、なぜかふくという女のこと頭が頭に浮かんだ。

おふく、舞台下手に現れる。

おふく

すず！ すず……！！ 下がれ……！！

すず M

最初、俺は夢か現うつつかわからなかった。俺の目の前に現れたのはふくだった。ふくはとっさに刀を構えると猪に斬りかかった。猪はその巨大すぎる身体で何度もふくを吹き飛ばした。だがふくは立ち上がり、何度も何度も刀を突き刺し、猪の身体を少しずつ削っていった。いったいどれほどの刻限が過ぎただろう。とうとう猪は転倒し、その巨体を地面に叩きつけたのである。

SE 獣の絶命する音くドシーンという猪の倒れる音。

すず おい！ なんで俺を助けた！？ 俺はお前を仲間だなんて思って

ねえぞ！ こんなになるまで……馬鹿だろ。さっさと逃げちまえ
ばよかったんだ！

すずM 強がりでもなんでもない。俺は本心からそう言った。だがふくは

俺を見ると、安心したように微笑んで、こう言ったのだ。

おふく か……掠り傷だ。たいしたことはない。

おふく、立ち去る。

すず M

掠り傷なんてことあるものか。こんなに嘘が下手な奴は見たことがなかった。でもその刹那、俺はふくをどうしようもなく好きになっちまった。いつか——ふくみたいな女になりたいって思った。

すずが立ち去り、おきくが入ってくる。

語り手

おきくは農家の生まれだった。五人いる子供の三番目で、幼い頃からよく家の手伝いをした。ある晩、蔵にあった大量の食糧が盗まれたことがあった。大食らいだったおきくは、真っ先に泥棒だと疑われた。

おきく M

あの頃は毎日毎日腹が減って仕方なかった。でも蔵のものに手を

出したりはしてねえ。だって俺が喰えば、兄弟たちが飢えに苦しむのがわかっていたから。でも父ちゃんは俺を何度も殴って、蔵に閉じ込めた。蔵の小窓から、三日間空だけを見て過ごした。三日目の夜、弟の半蔵が小窓の下に来て、食糧を盗んだのは自分だと白状した。父ちゃんに本当のことを言うんだと半蔵は泣きながら言ったので、俺はそれを止めた。四日目の朝に蔵から出してもらい、しばらくした後、俺は山寺に送られた。素行の悪さを叩き直してもらえと父ちゃんは言ったが、二月経ちふたつき、三月経った頃みつき、俺は口減らしのために捨てられたのだと悟った。

SE 夏、蝉の音など

おきくM

夏だった。山寺に、昔うちに入入りしていたことのある百姓が来

た。百姓は寺の掃除をしていた俺を見つけると、懐かしそうに二、三の言葉を交わした後、半蔵が死んだと言った。可哀そうに、川で溺れちまったと百姓は言ったが、俺はすぐに嘘だとわかった。泳ぎの得意な半蔵が川で溺れたりするはずがねえ。父親に折檻されて、川に捨てられたんだと思った。

SE 山道を駆け下りていく足音

おきくM 俺は箒を殴り捨てて山寺を飛び出した。無我夢中で山道を転がり

落ちて行きながら、父親を殺してやると思った。俺が家を出れば兄弟たちが楽になるなどと考えたのが悪かった。俺は俺を呪った。悔しかった。家に辿り着いて引き戸を蹴り飛ばすと、酒に酔った父親が俺を睨みつけた。まだ幼かった俺は振り返り討ちに遭った。意識が飛

ぶほど殴られて、山の中に捨てられた。

SE
夜の森の音

夜が来た。寒かった。でも足が動かなかった。這いずるように地べたを動き回り、腹が減ったので草や虫を喰って飢えを凌いだ。その時、ああ、そうか。俺はもう人間ではないのだと思った。

すずが下手前に入ってくる。

すず
おめえ、大丈夫かあ？ 生きてつか？

おきくM
俺と年恰好の近い女が、目の前に立っていた。それが初めて会っ

たすずだった。

すず

おめえは俺の一つ下だし、俺が助けてやったんだから、俺の【相棒】ってことにしてやるよ。あ、相棒ってわかるか？ 一緒に駕籠かごを担ぐ時の相手ってことだぞ。俺とお前で三笠の里のみんなを担いでやるんだ。どうだ？

おきくM

俺はずずに助けられ、そのまま三笠の里で暮らすことになった。俺はその日から、すずの相棒になった。

すず、おきく立ち去る。

暗転。

【七幕】 吉原遊郭

SE 騒がしい夜の遊郭の音

映像 遊郭っぽい艶やかな印象

ちはやが上手前に入ってくる。

語り手に照明サス。

語り手

ちはやの母は花魁だった。吉原遊郭の遊女の中で、最も位の高い者である。だがちはやは生まれた時から、頬ほおに大きな痣を持っていた。せつかくいい顔なのにこれじゃあたいして売り物にならないと母は言った。それでも遊郭の中で育てられたちはやは、遊女になる未来を受け入れて奉公に尽くすことができた。ちはやには、ただ一人、心を赦した男がいたからである。雇い人として宿に出入りしていた太助たすけという好青年である。

語り手、立ち去る。

ちはやM

禿かむろとして母の身の回りの世話をする頃から、太助さんだけは私に優しくしてくれた。母に内緒で何度もお菓子をくれたことがあった。太助さんはいつも明るかった。遊郭の外の話をたくさんしてくれた。太助さんは海が好きで、私は海を見たことがなかった。太助さんから海の話を知ると、私は自分の知らない世界が目の前に広がっていくのを感じて、胸の鼓動が高鳴った。

SE 小雨の音

ちはやM

十五になって、私の水揚げが決まった。初めて客と床入りするの

だ。客はその道に熟達した通人つうじんの中から、特に財力の豊かな者が選ばれることが多い。小雨の降る夜——私は二階の角部屋に向かい、挨拶をしてからゆつくりと襖を開けた。

SE
襖を開ける音

SE
部屋の灯籠の音

ちはやM

男がこちらを振り返った。おあがりと言って男は私を招き入れた。私を呼んだのは、太助さんだった。太助さんの近くに座ると、私は自分の脈打つ心の臓が、太助さんに聞こえるのではないかと思った。だが同時に、私の胸には疑念が渦巻き始めていた。太助さんは裕福な暮らしをしているようには思えなかったからだ。母が私の水揚げ代を釣り上げることが目に見えていた。私の最初の客にな

るために、太助さんはどれほどのお金を積んだのだろう。

SE
小雨の音

ちはやM

何年も太助さんを慕って来た気持ちだが、どす黒い幕に覆われていく。太助さんは私を買ったのだ。遊女であるならばそれは普通のことなのに——私は太助さんにだけは買われなくなかった。

SE
フェードアウト

ちはやM

太助さんが私に近づいてきた。太助さんはいつから私を「女」として見てきたのだろう。まだ幼い禿の頃からだろうか。太助さんはいつもの優しい顔で私の上に覆いかぶさってきた。だがその顔は、太

助さんの顔ではなく獣の顔に変わった。いや、それは幻だったのかもしれない。私の目にそう見えただけなのかもしれない。それでも私は恐怖で頭が混乱しあらんかぎりの力で太助さんを押しのけた。

SE ガンという物音

ちはやM 太助さんは倒れた拍子に頭を打って動かなくなった。部屋の灯籠が倒れ、畳に火が燃え移っていく。それでも自分が何をしたのかわからなかった。年若い禿が部屋に訪れて大きな声を出したときに、ようやく私は事態を理解した。

SE 木戸が激しく開く音、雨の中をバシヤバシヤと走る音

映像 雨

ちはやM

私は素足で外に飛び出していた。この遊郭のどこにも逃げ場などはない。足抜けしようとして何度も失敗した仲間がいる。血の気が、どンドン引いていく。取返しのつかないことをしてしまったのだ。私は水溜まりの中に倒れ込むと、そのまま動けなくなった。

SE

少し音が小さくなる

ちはやM

水溜まりに痣のある顔の半分を沈めながら、私は悔しくて泣いた。どうしてこんなことになったのだろう。私はずっと——太助さんと海が見たかっただけなのに——

SE

フェードアウト

らんが入ってくる。

ちはやM

しばらくして雨が止んだのかと思ったら、それは私の周りだけだった。背の高い女が私の上に傘を差しだしていた。

らん

このままここで野垂れ死ぬか。それとも私と来るか。

ちはやM

女の名前はらんだった。長い刀を腰に差した勇ましい姿は、仁王像のように迫力があつた。

らん

生きたいならば自分の足で立て。自分で這い上がるしか、この地獄から抜け出す道筋はない。

ちはや M

私は立ち上がった。そしてらんと共に三笠の里に行き、くノ一になった。

ちはや、らん、立ち去る。

暗転。

【八幕】大奥法度

SE 秋の鈴虫の音など

ちさと、入ってくる。

ちさと M

忍びの者が大奥に来てから、りんか様の様子がおかしくなっていた。元々、予兆はあった。りんか様は意固地で、何に付けても固

執するところがある。竹千代様のことではない。おふく様に対してのことだ。私はそれを一度ぶつけてみたことがある。

りんか、入ってくる。

ちさと

りんか様にとっておふく様とは何でございますか？

りんか

問うていることの意味がわからぬ。

ちさと

厚い忠義を尽くす、その御心みこころの元を知りたいのでございます。

りんか

あの方は……私の全てだ

ちさと
M

りんか様はそう言うと、昔を懐かしむように空を見上げた。

ちさと、立ち去る。

M2 琴の音など

りんか M

私は大奥に入るような家柄ではなかった。ただし武芸に秀でていることが買われ、御使番おつかいばんとして働くようになった。御使番とは御錠おじょう口ぐちの開閉をする門番である。数ある大奥の階級の中でも、最下層の一つであり將軍や御台所みだいどころへの目通りも許されてはいなかった。

りんか M

ある日、おふくという女がやってきた。小早川家の家老、稲葉正成の妻だという。おふくの魂胆は手に取るようにわかった。関ヶ原で寝返った後、小早川秀秋は裏切り者の汚名を着せられていたからだ。美濃で埋もれようとしている稲葉のために、將軍家の乳母を志願したに違いなかった。

りんか M

おふくは瞬く間にその才覚を現した。そしてとうとう幕府にかけあい「大奥法度」を作ったのである。武芸に秀でているというだけで、御錠口おじょうぐちの開閉をするだけの私とは雲泥の差であった。私はおふくを妬み、羨む気持ちに日に日に募っていくのを感じていた。

SE 夜の何かの音、梟など

映像 満月と流れる雲

りんか M

ある晩、おふくが外から戻ってきた。長男の稲葉正勝の屋敷へ出かけた帰りだとわかっていて。久しぶりの外出で気が緩んだのだろう、戌いぬの刻（夜八時頃）を過ぎていた。

おふくが入ってくる。

おふく
開けられよ。我を誰と心得る。

りんかM
おふくは威風堂々たる様子でそう言った。だが、私は開門しなかつた。

「大奥法度」で定められていたからである。戌の刻を過ぎた場合は、いかなる者も通すべからずと。

おふく
無礼者！！！！ さつさと開門せぬか！

りんかM
おふくは怒鳴り声を上げたが、私は動かなかつた。それは御使番としての責務を果たすためではない。千人の女中を束ねる雲の上の存在に、どこかで一矢報いてみたくなつたのだ。そうしておふくは夜通し門の前で過ごしたのである。

SE 朝の音（小鳥など）

りんかM

翌朝、多くの女中が私の元に集まり、私を罵り始めた。このことは將軍様の耳にも入るやもしれぬ。なんてことをしたのだと古い女中までが頭を抱えた。私は身の程を何も弁えていなかった――

私の元に集まった女中は十、二十と増えていき、私はそのまま詮議にかけられた。蔑みの目と言葉の刃が、四方から私に襲い掛かる。そうして最後に、おふくが將軍秀忠様と共にやってきたのである。

SE 長い廊下に響き渡る鈴の音

りんか M

秀忠様の少し後ろを歩くおふくは、鮮やかで深紅のお召し物を身に纏い、遠くからでも一目でわかるお姿であった。ゆっくりとこちらへ歩を進める時には、後光が差しているように思われた。その場にいた誰もが息を飲むほどに美しかった。まるで御仏そのものだった。

おふく

私の家臣を愚弄するとは何事か！！！！

りんか M

おふくは城中に響き渡るほどの声を張り上げた。剥き出しの敵意で私を取り囲んでいた全ての女中たちを、一太刀で薙ぎ払ったのである。

おふく

その者は「大奥法度」を守り抜いたにすぎぬ。そういう者こそが、

將軍様のお命をお護り出来るのだ。

おふく、立ち去る。

りんかM

その後、おふくは私に褒美までを賜り、私を自分のお傍に仕えさせたのである——それ以降、私はこの身の全てを【おふく様】に捧げると誓ったのである。

りんかが立ち去り、暗転。

【九幕】四万六千日の祭り

SE 祭りの準備など、城内の慌ただしい物音

語り手が入ってきて座る。

語り手に照明サス。

語り手

すずたちが大奥に入って早一年が経とうしていた。家康の死去で延期されていた竹千代の元服まであとわずかである。だが城内が賑わいを見せていたのは元服のせいばかりではなかった。

しまんろくせんいち
四万六千日の祭りが近づいていたからである。

毎年七月十日はよんまん四万六千日分の功德があるとされており、浅草寺は大きな賑わいを見せていた。その影響は江戸城にも及び、城内に祭りさながらの屋台が立ち並ぶほどであった。日頃、鬱憤の溜まる大奥女中たちにとって、それは最も楽しみにしている行事だと言える。

すず、おきくが下手前方に入ってくる。

おきく

すげーな、里の夏祭りだってこんなに屋台は並ばねーぞ。

すず

おきく。買い食いはほどほどにしろよ。

おきく

おいおいおい、買い食いは祭りの醍醐味だぞ。らんみたいなこと言うな。

すず

お前が買い占めたら俺の分がなくなるだろ！

おきく

あ、自分が食べてえーだけだな！

すず

うっせえ！

すずとおきくがワイワイやっている(アドリブ可)ところに、おふく、りんかが上手前方に入ってくる。

おふく 相変わらずやかましい奴らだ

すず ふくー！ 聞いてくれよー。

りんか おい！ おふく様と呼べ。

おふく すず、おきく、まもなく日が暮れる。充分に用心しろ。

おきく おう。俺は充分に腹を空かせてるからいくらでも食えるぞ。

おふく そうではない。城の警備を固めるのだ。

おきく どういうことだ？

おふく こういう宴の夜にこそ出るのだ、鬼が。

おきく 鬼！？ そういやすっかり忘れてた！

すず 上等だ。叩き斬ってやるぜ。行こうぜ、おきく。

おきく お、おい！ すず！

すず、おきく、立ち去る。

おふく、下手前へ移動。

りんか おふく様、お言葉ですが鬼なぞは——

おふく 出ないとは言いい切れん。今宵は人が集まる。鬼が紛れるならば、こんな夜に違いない。

りんか ……

おふく 私はなんとしても——（苦しそうに咳き込む）

りんか ！ おふく様！ 袖元に血が……！

おふく あ、案ずるな………たいしたことない（苦しそう）

M3 しつとりとしたピアノ

りんか おふく様………わたくしは全て存じております。おふく様が病にか

かっていることも、竹千代様がどれほど懇願してもお菓を口にしていけないことも。

おふく ……お主には嘘がつけんな。

りんか お願い致します。どうかお菓をお飲みください。

おふく 権現様に示しが付かぬ。

語り手 権現様とは家康の死後に付けられた尊称である。家康は神格化さ

れ、死後も多くの人に影響を与え続けたのである。

おふく 私は生涯菓を吞まぬと誓ったのだ。

りんか ですが……！ おふく様に万が一のことがあったら、竹千代様は

どうなるのです？ あの方は、おふく様を本当の母のように――

おふく ……

りんか

それにわたくしは竹千代様からきつく申し渡しされております。なんとしてもおふく様に御薬を吞ませるようにと。これは竹千代様から賜った御薬です。おふく様のために、遠く北國から取り寄せたと仰っておられました。必ずお飲み頂きますよう。

語り手

りんかはそう言うと、袂から取り出した薬をおふくに手渡した。

りんか、立ち去り、おふくが舞台中央へ。

語り手

おふくは手元の薬をじっと見つめた。そして誰よりも優しく聡明な竹千代を誇らしく思った。

おふく

初めて、この手に、竹千代様を抱き上げた日、乳を飲ませた日のこ

とは生涯忘れぬ。立派な將軍になるその日まで……私は簡単に果てるわけにはいかぬ。

語り手

そう言うと、おふくはりんかから受け取った薬を庭に投げ捨てた

おふく

りんか、心配には及ばぬ。何があっても私は竹千代様を護る。権現様となったあの御方が、今も私を護ってくださいるように。

おふく、立ち去る。

【十幕】百鬼夜行の宴

SE 夜の祭りの音

映像 提灯や人混みの様子

語り手 元和三年、七月九日、夜。とうとうその時が来た。城内にはたくさ

んの出店が並び、多くの人が酒を飲み、我を忘れて宴に酔いしれた。日頃は雑務やしきたりに振り回される大奥の女中たちも、この時ばかりは時を忘れて、祭りの狂乱に酔いしれていた。

SE フェード

語り手 その時、お面を付けた一団が集まってきた。何か祭りの余興でも

始まるのだと、居合わせた誰もが胸を躍らせた。だがりんかだけが

顔を真っ青にして身構えた。一団の付けているお面は、全員異様な形をした鬼だったからである。鬼の面を付けた者たちが列をなして大広間に立ち並んだ。その有様は——絵巻物に描かれる、百鬼夜行そのものだった。

りんかが舞台上手前に出てくる。

りんか

お主ら！ 何者だ！

語り手

りんかがそう叫んだのと同時だった。鬼たちは小刀を取り出すと、その場にいた女たちを次々と切り裂き始めた。城内に、悲鳴と怒号が渦巻く。辺りは一変に地獄絵図と化した。

M 4 激しい戦いの曲

SE 悲鳴や怒号など、剣の交わる音など

映像 炎

りんか であえ〜！ であえ〜〜〜！！！！

語り手 すぐに臨戦態勢が取れたのはりんかだけであった。多くの女中た

ちは逃げ惑い、後ろから串刺しにされた。多くの血が流れ、江戸城
が真っ赤に染まっていく。いったい広い江戸城のどこに潜んでい
たのか。鬼の数は二十、三十と増えて行った。

りんか おのれっ！ どこにこれほどの者が！！！！

語り手

りんかが多くの鬼に囲まれたその時だった。闇の中から飛び出してきた長身の女が次々と鬼を斬り払った。鮮血が女の目に、鼻に、口に飛び散った。女はそれを拭うこともなく、りんかに向かって叫んだ。

らんが舞台下手前に来る。

らん

ここは私に任せろ！

りんか

！ だがお主一人では――

らん

血に飢えた獣に、手助けなど要らぬわ！

りんか、立ち去る。

らん
何が鬼だ！ どいつもこいつも、私と同じ朱い血を流しているではないか。かかってこい。一人残らず斬り殺してやる！

SE
爆発して燃え盛る音

らんが立ち去り、おふく、すず、おきくが入れ替わりで出てくる。

すず
どうなってんだよ！ これ！

おきく
あちこちに火の手が上がってんぞ！

おふく
敵襲だ。大広間に出て、敵を殲滅しろ。

すず
ふくはどうするんだよ！？

おふく
決まっている。命に代えても竹千代様をお守りするのだ。

おふくが立ち去る。

おきく よし。すず、行こうぜ！

すず ……

おきく すず？

すず 敵の狙いが竹千代なのだとしたら、大広間のほうは囿で……本当の猛者もは竹千代おくのところに来るんじゃないのか。

おきく は？ おめー何言ってるんだ？

すず ふく一人で竹千代を護れると思うか？

おきく 何言ってるんだよ。すずだってふくの強さを知ってるんだろ！

すず それは何年も前の話だ！ 今のふくが同じ強さだと限らねえ！

おきく おい。何をそんなにムキになって――

すず 俺は怖い。ふくが遠くに行っちまいそうで……怖いんだ。

すず、立ち去る。

おきく

お、おい！ そっちは大広間とは——ったく、相棒を放っておいてすぐ遠くに行っちゃまうのはどっちだよ！

おきく、すずの後を追いかける。

SE

半鐘（江戸に鳴り響く鐘の音）

らんが上手前に出てくる。

語り手

あまた転がる屍の中に、らんの姿はあった。返り血で染まった顔には表情など見当たらない。敵の刃にかかり、潰されてしまった右目からは大量の血が滴り落ちていた。

らん

ここまで散々待たされたのだ……こんなものか……鬼というのは、この程度の者なのかつ!!!!!!!!!!!!

語り手

四人の敵がらんを取り囲み、一斉に飛び掛かった。らんは三人を薙ぎ払った。だが四人目の刃が、やいばらんの左腕を斬り落とした。らんは膝をつき、獣のような叫び声を上げた。

らん

うわああああアア!!!!!!!!

語り手

最後の一人が、再びらんに襲い掛かろうとした瞬間だった。ちはやが飛び込んできて、敵の喉元を切り裂いたのである。

ちはやが下手前に出てくる。

ちはや

らん！ らん……！！！！ どうして一人でこんな無茶なことを！

らん

ちはやか……

ちはや

すぐに手当てをする！ 動かないで！

らん

私のことは構うな。

ちはや

このままじゃらんが死んじゃう！！

語り手

俯いたちはやの目には涙が溢れていた。らんは残された右手でちはやの顔に手を伸ばした。そして菩薩のような笑みを浮かべるとちはやの涙を拭い取った。

らん
泣くな。ちはや。

ちはや
らん……

らん
ここで暮らして約一年……身に沁みてわかった。天下泰平の世に、私の生き場などないのだ。

ちはや
……

らん
だが……お前たちは違う。平和な世でも生きていくことが出来るだろう。

ちはや
違う……らんだって生きていける。

らん
私は剣に生き、剣に死ぬと決めていた。戦場いくさばこそが……華なのだ。

語り手
敵が再び集まり、らんとちはやを取り囲もうとしていた。だがち

はやが立ち上がろうとすると、らんはそれを制した。

ちはや
私も戦う！

らん
無理するな。お前に戦いは向いていない。

ちはや
らんが死ぬなら、私もここで死んだって構わない！！！！

M 5
切ない曲

らん
ちはや。一つお前に謝らなくてはならないことがある。私はお前
と出会った遊郭に、あの後あとも何度か訪れたことがある。そこで一人
の男がお前をずっと探していることを知ったのだ。

ちはや
……………！！

らん
あとで聞いてわかった。それがお前の想い人……太助という男だ
ということに。だが私は……お前にそれを告げなかった。なぜだか

わかるか。私は——お前のことを失いたくなかったのだ。私は……
私はお前のことを——

ちはや　もういい。お願い……お願いだから。

らん　……

ちはや　あの雨の夜——私はらんにあわなかったらきつと死んでた。あの
日から、今日までずっと、これからもずっと……らんは一番大切な
人なんだよ。

らん　お前は死ぬな。そしていつかここを出たら、あの遊郭の男に会い
に行け。

ちはや　らん！

らん　行け！！！！

語り手　らんは片手でちはやを押し飛ばした。射貫くような目でちはやを

睨みつけると、ちはやは全てを受け入れ、その場を立ち去っていった。

ちはや、立ち去る。

らん、舞台中央へ。

M 6 立ち上がる女の勇ましい曲

語り手

燃え盛る江戸城に——阿修羅のごとき女が立ち上がった。右目を潰され、左腕を斬り落とされたくノ一である。その場にいた誰もが、飛び交う火の粉を振り払うのを忘れた。ただただその女に目を奪われたからである。女は狂ったようにけたたましく笑ったかと思うと、刀を高く突き上げた。

らん
我が名はらん！ 三笠の里の忍びなり！

SE 崩れ落ちる天井の音、燃え盛る江戸城の音など。

らんが立ち去り、すず、おきく、りんか、ちさとが出てくる。

すず
ふく！ ふくは！？

りんか
それが見当たらぬのだ。

おきく
竹千代のところか！？

ちさと
りんか様！ 竹千代様はいずこに！？

りんか
わからぬ。おふく様のことだ。どこかに逃げ道を用意していたのかもしれない。

ちさと
火の手が回っております……！ ここも、いつ崩れ落ちるやもわ

かりませぬ！

りんか

おふく様を置いて逃げ出せというのか！

語り手

その時、白煙の中で人影が動いたかと思うと、おふくがその姿を現した。

おふくが舞台中央に現れる。

ちさと

おふく様！

語り手

誰よりも早く、飛び付くようにちさとがおふくへと駆け寄った。

おふくは微動だにせず、ちさとのことを受け入れた。だがその鳩尾みぞおちからは、夥しい鮮血が噴き出していた。ちさとが——おふくを刺し

たのである。

すず

ふく——！！！！

りんか

ちさととおお！ お主、血迷ったかあ！

ちさと

(荒い呼吸)

M7

不穏な雰囲気

語り手

おふくはちさとを抱き寄せた。おふくの腹に刺さる小刀が、身体
の奥深くへと進んでいく。それでもおふくは、仏のような穏やか声
で、ちさとに声をかけた。

おふく

お主であったか……ここにあまたの鬼たちを招き入れたのは……

ちさと
(呼吸が荒い)

おふく
竹千代様を狙う……鬼たちの正体は……さしずめ朝廷の子飼いの
忍びたちだろう。

りんか
まさか……ちさとが――

ちさと
全ては、おふく様が悪うのでございます!!!!

りんか
なぜだ。おふく様がお主に何をした？

おふく
私が……殺したのだ。ちさとの想い人を――

ちさと
……ご存じだったのですね。

りんか
どういうことだ!?

ちさと
おふく様が大奥法度を定めて間もない頃、城内に侵入して磔にさ

れた若侍……それが私の想い人でございます。

りんか
では、その腹いせに――

ちさと
腹いせ？ そんな言葉では済まされませぬ！ おふく様が日々嚴

格化する大奥法度のせいで、殿方に文のふみ一つも送れなくなり、易々と逢瀬が出来なくなつたのです！

りんか

下らぬ！ 大奥は天下泰平のためにあるのだ！ お主ごときの色恋に振り回されるものではない！

ちさと

りんか様にはわかりませぬ！！ あなた様の目には、おふく様しか映っていらつしやらないではありませんか！

りんか

……！！

ちさと

わたくしは衆人の前で無惨に晒され、烏からすに死肉をついばまれる想い人を見ました。それでも、涙一つ流すことが出来なかつたのです。その苦しみは、地獄の釜と同じで御座います。悔しくて、辛くて、気が狂うほどの日々も、雑務に忙殺されていきました。やがて想い人が、夢にも現れなくなりました。その時、わたくしは、こうして女は狂うのだと悟つたのです。天下泰平……そんなものは取

るに足りない些末事で御座います。だからわたくしは、徳川家に反発する輩を何年も探し、準備をしてきたのです。

りんか 愚か者がっ……！ おふく様から離れろ！

おふく 構わぬ。

りんか しかし！

おふく どうせ幾ばくも無い命なのだ。

りんか おふくさま……

おふく ちさと。済まなかった。お主の心を鬼の棲家としてしまったのは、

ほかならぬ私のせいだ。お主は誰よりも清く……正しい心を持つ

ていたはずなのに。

ちさと 黙れ！ 何がわかる！

おふく わからぬ、何も。

おふく

人の心は、底の見えない闇と同じだ。だから鬼はそこに付け込むのだ。……ちさと、周りを見る。その眼を見開いて、屍の山を見ろ。私が憎い——その一心でお主がしでかしたことは、これだけの尊き命を奪ってしまった。

ちさと

(目を見開き、ワナワナと震える)

おふく

ちさと。いかなる時も、人を裁くのは人であってはならぬのだ。たとえ子を殺されたからと言っても、人を殺していい道理はないのだ。理屈なんでものは一時の感情で簡単に上塗り出来てしまう。さればこそ、不動たる規律を重んじ、法度を定めるのではないか。

ちさと

……黙れ……黙れ黙れ！ 私は何も悪くない！！！！

おふく

案ずるな。お主の業をお主だけに背負わせたりはせぬ。

語り手

おふくはちさとを抱きしめたまま、小刀を取り出した。そうして、
なんのためらいもなく、ちさとの首を切り裂いた。

ちさと

(絶命の声)

ちさが立ち去る。

おふくとすずが中央に移動し、おきくとりんかが左右に広がる。

おふく

ちさと……共に地獄の業火に焼かれようぞ (咳き込み苦しむ)

りんか

おふく様!

おきく

おい、ふく! 大丈夫かよ!?

すず

ふく……なんでこんなことに――

おふく　　すず、おきく。すまなかつた。お主たちを巻き込んだ。

おきく　　俺は構わねえけど、ふくが――

すず　　ふく！ 幾ばくもない命ってどういうことだよ。

りんか　　おふく様は……病に侵されているのだ。

おきく　　病？ それもう治らねーのか？ 死んじまうのか？

おふく　　いつかこんな日が来ることはわかっていた。父を磔にされた私が、

同じことをしたのだ。ちさとのような者を生んでしまったのも、私の業に他ならない。報いは受けねばならぬ。

すず　　ふく、俺はぜってえ認めねーぞ。

おふく　　……

すず　　ふくはいつも同じだ。俺を置いて勝手にどっか行って、たまにフラッと帰って来ては、酒を飲んで俺をからかった。俺はずっと、ふくの力になりたくて必死に修行したんだぞ。それなのに、なんでふ

くはいつも独りで、勝手に全部背負うんだよ。

おふく 独りではない。今も……お主たちがいるではないか。おかげで竹

千代様を無事に逃がすことができたのだ。

すず 竹千代なんて関係ねえ！ ふくが死んだら意味がねえだろ！！

ふく それは違う。竹千代様が全てだ。二度と戦を起こさぬ（苦しむ）

りんか おふく様！ もう喋らないでください……！！

おふく すず……！ すず！ よく聞け。【春日局】……それが、私が中宮かすがのつぼね

和子様から賜った高貴な名だ。私が死んだ後、その尊き名を……お

主が名乗り、盤石な大奥を築いていくのだ。

すず ……嫌だ。認めねえぞ。そんな名はいらねえ。

おきく すず！ ふくの最期の願いだぞ！

すず 嫌だ！ 絶対に嫌だ！

おふく 竹千代様には全てを話してある。今日より以降、大奥総取締の任

は、三笠の里の忍び———すずに託すと。

すず
嫌だ———!!!!

SE 天井が崩れ落ちる音。

M9 優しく力強さを感じる曲

おふく
思えば数奇な人生であった。父を豊臣に殺され、三笠の里に流れ

着き、大奥に入って家康様に世話になった。だが今、目に浮かぶのは———すず、初めて会ったときのお主の顔だ。私を睨みつける、目つきの悪い、小生意気な、娘であった。私は……いつか……お前を

本当の———

おきく
ふく！ ふく！

すず
あああああああ———!!!!

語り手

おふくはゆっくりと目を瞑った。そうして安らかな顔のまま、黄泉の国へと旅立ったのである。

おふくが立ち去る。

SE 天井が崩れ落ちる音。

映像 炎

おきく

すず！ ここは危ねえぞ！

りんか

裏手から城外に出られる。お主たちは急ぐのだ。

おきく

お主たちはって……おめーはどうすんだよ！？

りんか

我が主君の傍を離れたりはせぬ。たとえ業火に焼かれようとも。

すず
ふく……ふく……

りんか
急ぐのだ！

おきく
すず！ 行くぞ……！ 俺は、お前を絶対死なせたりはしね

え！！

おきく、すず、立ち去る。

りんか
おふく様……りんかは死んでもあなた様のお傍を離れませぬ。

りんか、立ち去る。

語り手
そう言うと、りんかは亡骸となったおふくを抱えて、燃え盛る城

の奥深くへ消えて行った。元和三年、夏。漆黒の空に、炎上する江

戸城がいつまでも灯りを照らし続けたのである。

暗転。

【第十一幕】春日局

語り手

元和六年。未曾有みぞうの大火災から修復した江戸城に、多くの人が集まっていた。酒井忠利さかいただとし・内藤清次ないとうきよつぐ・青山忠俊あおやまただとしといった大名ばかりではない。国中の高貴な女たちが集められ、一同に会していた。全ては竹千代改め、徳川三代将軍・家光の世継ぎを身籠るためである。まだ元服したばかりの家光は凛々しく清らかで、その若さには似合わぬ威風堂々たる様であった。

M10 エンディング

映像 舞い散る桜

語り手

その時、大広間の先に一人の女が立った。鮮やかな深紅の召し物が、陽の光に反射して輝いた。女がゆっくり歩を進めると、まるで後光が差したかのように思えた。その場にいた誰もが、女の美しさに目を奪われ、ざんじ 暫時は息をするのさえ忘れてしまったほどである。

すず、舞台中央へ来る。

語り手

女は家光の前に膝をついた。そして首を垂たれた後、真まなこつすぐな眼で正面を見据え、高らかに声を上げた。

すず

大奥総取締の名、ありがたく頂戴致しまする！ 春日局にござり
まする！

暗転。

エンドロール。(約1分)

明転。

カーテンコール。

了